

調査・報告

第一小学校に保管されていた瓦についての一考察

帝塚山大学大学院生 木村友紀

島本町立第一小学校は島本町埋蔵文化財包蔵地「広瀬遺跡」の中にあり、平成元年に実施したプール建設に伴う発掘調査では、多くの遺構や土器が出土した。以前から大きな瓦を保管していると、教頭より連絡があり拝見すると完形品の軒平瓦と新しい時代の飾り瓦が一緒にあった。以下は保管されていた軒丸瓦についての考察である。

軒平瓦について

この軒平瓦の文様は半截花文であり、中心飾りは半円状の中房を中心に置き、その周りに弁端に切り込みの入った花弁を五枚配したものである。中心飾りの上方から左右に唐草が伸び、二回反転し、唐草の先端付近には花弁状のものを置く。全長 32.0cm、広端幅 23.1cm、狭端幅 20.2cm と広端幅と狭端幅の差が小さく、長方形に近い形を成している。平瓦部凹面はやや粗い布目痕を明瞭に残し、凸面は無文の叩き板によってタタキを行なった後、ナデを行なう。瓦当部上縁・瓦当部下縁・頸後縁の面取りは行なわれていない。焼成は良好で硬質、色調は灰白色を呈す。胎土は緻密であるが、0.5cm 以下の石英を多く含む。完形品であるため、平瓦部と瓦当部の接合技法を断面から観察することはできなかった。狭端面には数条の工具痕を残すが、瓦の大きさを切り揃える際のヘラ切り痕であろうか。

平成 21 年度以降の広瀬遺跡の発掘調査(以下、調査と記す)では、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮と同時代に関連する建物跡と考えられる遺構を検出し、その建物跡に使用されたと考えられる多くの瓦が出土した。第一小学校は調査地に近接しており、保管されていた瓦(以下、本資料と記す)がもし第一小学校付近で採集されたものであるならば、本資料も水無瀬離宮に関連する建物で使用されていた可能性が高いと考えられる。しかし、調査で出土した軒平瓦の文様は剣頭文・唐草文を中心としており、本資料のような半截花文のものは出土していない。また、全長も調査で出土したものが 20.0cm 前後であるのに対して、本資料は 32.0cm と明確に法量が異なっている。出土した瓦のほとんどは、文様・法量・瓦当部の成形技法・各部の調整技法から京都産のものであると考えられるが、本資料の文様の類例は京都産の瓦ではなく、平安時代末から鎌倉時代初頭の播磨産の瓦に見られる。また、鳥羽離宮金剛心院跡で出土した播磨産の平瓦は法量によって 3 種に分類されているが、その中でも中型品である平瓦 B は全長が平均 32.7cm と数値が近く、平瓦 B の半数は、本資料と同様に、無文タタキにより調整されている。これらのことから、本資料も播磨産の可能性が高いと考えられる。

院政期の離宮跡の大きな特徴として、京都産の瓦だけでなく、丹波・大和・播磨・尾張・讃岐といった様々な国で生産した瓦が出土する点が挙げられ、調査でも、ほとんどの瓦は京都産のものであるが、和泉系の連珠文軒平瓦も 2 点出土している。このことは水無瀬離宮が、他の院政期の離宮跡と異なり、造営された場所が京都ではなく摂津という立地上の違いから、在地で生産された瓦が混

入した可能性も考えることができる。しかし、本資料が播磨産であり、水無瀬離宮に関連する建物に使用されていたのであれば、他の院政期の離宮と同様に、水無瀬離宮も造営に際して様々な国から瓦が供給されていた可能性が高くなる。ただし、調査で出土した瓦とこの瓦は法量の違いから同じ建物に葺くことはできない。そのため、本資料は水無瀬離宮関連の別の建物に葺かれていたものであろう。調査で出土した瓦は法量や出土点数から寝殿等の葺棟に使用されたことが想定できるが、本資料が本瓦葺きのように建物の屋根全面に葺かれたかどうかは今後の発掘調査成果を待たねばならない。

表1 軒平瓦観察表

単位: cm

No.	瓦当部					平瓦部			
	文 様	高 さ	瓦当厚	外区幅	外区高	全 長	広端幅	狭端幅	高 さ
1	半截花文	4.7	2.8	0.7	0.8	32.0	23.1	20.0	2.0

備考: 平瓦部凹面に粗い布目痕、凸面に無文タタキ痕が残る。

